

どうりダニ駆除を実施すれば、1～2年で石垣島のダニは撲滅できる。若し、一生懸命頑張って1～2年後にダニが見つかったら、私のポケットマネーで1匹千円で買いますよ。」と言ったら、皆んな半信半疑であった。

また、事業開始後も、「今まで何10年もかかって撲滅できなかったダニを1～2年で撲滅できるはずはない。」と言って、当初は消極的な農家が多く、かならずしも順風満帆ではなかった。しかし、ダニ駆除の回数が増える毎に、その効果が表われ、だんだん積極的に実施するようになり、島ぐるみのダニ駆除事業となった。

ついに、今まで多くの人達の苦勞が実を結び、牧野ダニが撲滅され、牧野衛生上の大きな生産阻害要因が除去されたので、今後より一層、八重山の肉用牛を振興することと、他地域からの牧野ダニの侵入を未然に防止することを祈念するものである。

(八重山家畜保健衛生所 第7代所長)

オウシマダニ撲滅記念によせて



中部種畜育成センター
川上英夫

八重山の肉用牛飼養頭数の伸びは、著しいものがあり、その増頭の要因としては…

- 1 オウシマダニ撲滅による生産阻害要因の除去ができたこと
- 2 畜産基地建設事業等による粗飼料生産基盤の整備・充実
- 3 国、県、畜産公社の実施する価格安定対策等及び各種奨励事業の効果
- 4 竹富町の各離島における水の安定供給（波照

間島では、海水の淡水化)

等が重なって効果がでてきたものと考えます。

「夢みたいなこと」と言われたオウシマダニの撲滅は、ついに現実のものとなりました。「1頭もれなく」を合言葉に、実に27年の長きにわたり、多くの人々の努力と予算、新たな薬剤によって達成できたのです。まさに「継続は力なり」の一言につきる思いです。

先人、先輩方の御勞苦に対し、ただ感謝あるのみです。

これまで、生産農家の皆様方、改良組合、石垣市、竹富町、与那国町、J A、共済組合、共済診療所、県関係機関が一体となって推進してきた血と汗と涙の結晶が、オウシマダニ撲滅という金字塔を打ち立てたのです。本当にお目出とうございます。

私が赴任したのは、事業の最終段階であり、西表島内離・外離における対応はどうするかという時期でした。その時の神山畜産課長の発案により、野生化した牛の県買上げ、処分を決定したのです。各家保からの応援、八重山猟友会、竹富町、石垣市、J A、共済組合等の御協力を頂き、最終的にオウシマダニ撲滅事業が終了したと言えます。特に、八重山猟友会の働きは目ざましく、彼等なくしては牛の捕獲はできなかった事でしょう。

その後鑑察期間として、牛体付着ダニの有無、バベシア原虫の確認、貧血の確認等を行ってきました。オウシマダニ撲滅は、「世界的偉業であること」その歴史を我々が作っているという自覚をもって頑張ってくれと、若い技術員や職員にお願いしてきました。

ところが、オウシマダニ清浄維持対策事業の詰めとなった平成9年3月20日に台湾で「海外悪性伝染である口蹄疫」の発生という事態になり、眠られぬ毎日でした。八重山に侵入をゆるせば、沖縄県のみならず日本国の畜産は壊滅的な状態にな

るという心境でした。

しかし、いち早く「八重山地域口蹄疫侵入防止体制」を組織化し、少ない職員でありながら全所体制で種々の対応ができました。そしてダニ事業しかり、口蹄疫対策も含めて常に県家畜衛生試験場の仲村場長、職員のバックアップ体制で、なに事もなく今日に至った事に対し、絶大なる感謝を申し上げます。

基本に忠実に、常に前進する事を期待して八重山畜産の更なる御発展を祈念致します。
(八重山家畜保健衛生所 第9代所長)

オウシマダニ撲滅を達成して



八重山家畜保健衛生所
所長 那 根 元

一介の獣医師、畜産指導員として竹富町役場の経済課に就職してから県職員となって、早や30有余年の歳月の経ったことをしみじみと実感している。

恵まれない不便な離島の診療業務に情熱を燃やし、島々、村々を巡回していたことで、多くのご先輩方と深い人間関係が続いていることを誇りに思い幸運な男と思っている。

特に急患の電話はピロプラズマ病の診療が多く、牛にダニが無数に寄生しており、ダニの吸血、損耗による牛の削瘦がひどかった。

リングル液とブドウ糖、チオクタン剤などを大量に船に積み込んで、イスラビンの静清注後に補液していった。助かった牛も多かったが、しかし、高熱、貧血、黄疸、血尿を呈し手遅れでへい死する導入牛も多かった。

その現場を見て家族そろって涙を流している姿

が今も忘れられず胸が痛むところである。当時は家畜共済制度もなく、自損行為のようで仕方のない悲劇であった。

γ-BHC水和剤による薬浴を実施したがダニも殺すが牛も中毒死するというので危険きわまりないダニ駆除であり、仕方なく何枚も何枚も死亡診断書を書き補償対策によって畜産農家を勇気づけていたことも決して忘れてはならないことである。

昭和45年に時の農林技官、間邦彦先生がご来島されて、牧野ダニの現地調査に同行して大目玉を食らったことも今にしては貴重な思い出の1つである。

この時の間先生の高い見地からの行政手腕によって八重山群島のオウシマダニとピロプラズマ病が完全に撲滅できたと申し上げても過言ではない。次いで津曲公夫先生の綿密なる0作戦が一致し大きな推進力となり全体が打って一丸となったダニ駆除体制ができたのである。

昭和60年頃は「沖縄県は何年間ダニ駆除をやれば気がすむのか」と大蔵省あたりが言っているぞと伝え聞いた時は逃げ場のない恐怖心かられたものである。

かくして、28年間の歳月をかけてオウシマダニ撲滅の悲願が達成されたことは天の時、地の利、人の和を信じて「オウシマダニ撲滅に挑んだ」各地域、島々で生涯をかけた先人達、打って一丸となって賢明に努力した多くの畜産農家の方々、そして、この志気を鼓舞した獣医、畜産指導者の尊い汗と涙と血のにじむような努力の偉業にほかならない。

「百里の道は九十九里をもって中途とす」をオウシマダニ・ゼロ作戦の根幹としてたゆまぬ努力による集団効果は世界的な評価として特筆されるべきことではないかと自慢しているところである。

この28年、さらには46年の歳月の流れと、ひと

つのマダニ種属がこの地離島の離島という消費地から一番遠い場所にあつて、筆舌に尽くし難い離島苦を背負い牛飼いを業とし、原野を切り開き未利用、低利用の生産環境を改善し、それとともにオウシマダニを撲滅したことによって生産者の側が薬剤をまったく必要とせず、安全性の高い肉用牛の生産体制が確立できたことを見逃してはならない出来事である。

これ等、畜産行政に携ってきた人達は「一隅を照らすは国宝なり」と呼称されるに値することではないだろうか。

われわれは「1頭もれなく」を鉄則として生産障害要因であったオウシマダニに打ち勝ち、近代的な生産基盤を構築できたことは、八重山地域における21世紀に向けた第1次産業の伸展の礎となることを確信するものである。

ここに、有名、無名の先人達や、獣医、畜産技術者、畜産農家のかたがたとともにオウシマダニ撲滅の勝利宣言を声高らかに誓い、豊作をもたらす神々に感謝を捧げるものである。

最後に、詩の邦、歌の島、踊りの島の八重山で最も有名な「とうばら一ま」に歌詞を添えて謳歌したい。

畜産の大敵、ダニ撲滅が国のお力で、成し遂げられてイーランゾーシヌ、牛、馬喜ばし

へり散布、薬浴のお陰でオウシマダニが姿を消して、畜産農家を喜ばせ

イーラゾーシヌ、牛、馬喜ばし

八重山家畜衛生所のご指導で、一匹のダニの姿も見えずイーランゾシヌ八重山牛の名を挙げて

これから先も、八重山の畜産が日本各地の、手本

になるようにイーランゾシヌ皆々様、頑張りましょう。(作・石垣信知)
(八重山家畜保健衛生所 第10代所長)

国費による牧野ダニ駆除事業の思い出について



屋富祖 幸 栄

この事業が始まったのは昭和46年度からで、沖縄が本土復帰するということで、本土の法律が沖縄に適応された場合、家畜法定伝染病であるピロプラズマ病を媒介するダニを撲滅する必要があり、その対策を国が本格的に取ったのが始まりである。それまでは沖縄においてはDDT、BHC製剤を使用しダニ駆除を実施したが、なかなか効果が上がらず、対象療法的で完全駆除にはいたらなかった。むしろ使用濃度によって、子牛、体調の悪い牛は中毒を起こすのもしばしばであった。午前中に薬浴すると午後には中毒牛が出たものである。そのため薬浴の際には必ず中毒の治療薬を持参したものである。

当時ダニ駆除は薬浴槽のある牧場ではデイピング法、繋牧地の牛には噴霧器で薬品を噴霧し、実施した。また牧野には人力で、横一列に噴霧器を担いで勢揃いして一斉に薬品を散布してダニ駆除を実施した。特に竹富、黒島の畜主が総出して実施したのが、苦しかったが、なつかしい思い出の一つである。

昭和45年8月(ダニの発生が多い時期)に、農林省畜産局衛生課から技官が、沖縄の家畜衛生状況調査等特にダニの発生状況、分布状況調査のため派遣された。

同技官は8月25日に来沖し、琉球政府と打ち合わせした後、直ぐに現地八重山に飛び、八重山支庁に関係者を集め、事業の趣旨を説明し調査に入った。

説明の中で概略、技官は、八重山の牛の全頭数の血液検査、全牧野に薬品をヘリコプターで散布すると説明した。その話を聞いた地元関係者は半信半疑の顔していた。

[まさか？本当に、牧場にヘリコプターでクスリを散けるかね！それだけのクスリと予算が取れるかなー？] と言うのがうかぬ顔の理由であった。そのため農家によってはこの事業は夢物語と調べて調査に非協力的な者もあった。同技官は短期間で八重山の全牧野牧場をくまなく調査し、それを直ちに数字に積算し、昭和46年度の予算要求に間に合わせたのである。それが見事に10/10国庫全額大蔵に認められ予算化し実施に移したのである。

当時琉球政府のダニ駆除の担当者として、調査のため連続して16日間も石垣に滞在し、寝食を共にし御苦労され、この事業を成し遂げたことに対し、ここで改めて感謝申しあげたい。本当にありがとうございました。昼間は牧場や牛のダニの寄生状況の調査、夜はホテルで数字の積算点検、同時に日政援助資料の作成、総理府への陳情資料の作成等々を短期間で処理した苦労は今でも記憶に残っております。国の役人の仕事ぶり、日夜を問わず、その凄まじい仕事ぶり！を知らされたものです。

今日、八重山のダニが完全に駆除され終息宣言をすることが出来たのも、地元農家をはじめ技術員が一丸となって実施したこと、更にスタートの段階で、このように良い指導者がいて、財政厳しい中で多額の予算を確保し継続させた国の特別の配慮が大きかったからだと思います。

もう一つ、八重山のダニが駆除された理由のひとつに牛の飼養形態が変わったことが上げられると思います。復帰以前までは八重山の牛の飼育形態は、畜舎が皆無の状態、ほとんど牧場か野原

で繋いで飼育する繋牧の方法しかなかった。そのためダニ駆除する際、朝夕移動する繋牧牛対策が問題であった。定位置に牛が係留されてなく、朝夕牛を移動させるため、ダニ駆除事業の障害にもなった。それが復帰を機に、土地改良事業や牧場、採草地の整備がすすみ、更に乾草や貯蔵技術が確立されたため繋牧場がなくなり、ダニ駆除事業が徹底してきたことが効を奏したものと思われます。

オウシマダニ撲滅によせて



平安名 盛 己

このたび、オウシマダニおよびバベシア病が撲滅されたことにちなんで、記念誌を発行するのでエピソード等を書いて欲しいとの依頼が県畜産課から舞い込んできました。かつて、オウシマダニに関する研究に携わったことがあるとはいえ、公務員を中途退職し、今は小動物臨床に手を染めている私には、遠い記憶を紐解くような作業は勘弁願いたいというのが素直な気持ちでした。あまりにも多すぎる思い出をどこからどう書いたらいいか迷い、遅々として進まぬ筆に悶々とした挙げ句、オウシマダニ駆除事業が、それまでのエンドレスバトルからゴールの見える事業になるまでの経緯などについてエピソードをまじえて書いてみることにしました。極めて私的な文章であるとの誇りはまぬがれないかも知れないが、貧弱な文章力は覚悟の上いつくまを綴ってみたいと思います。

昭和50年6月に公務員最初の赴任地である八重山の空港におりたち、出迎えてもらった那根元氏の運転する車にゆられながら社会人第1歩をあゆ

み出しました。家畜保健衛生所に向かう途中で見た牛達の鼻鏡が白やピンクなどの色を呈していたのは鮮烈なおどろきとして今でも脳裏に焼付いています。それらの鼻の色はステファノフィラリア症の一症状であることは、山城英文所長がダニの被害とともに熱く語ってくれました。学生時代はほとんど問題視されなかったオウシマダニと鼻鏡白斑症（ステファノフィラリア症）が、ここ八重山では畜産の振興を妨げるほどの存在になっていることは思いもよらぬことであり、南方の未開地に赴任したような気の重さを少しばかり感じた公務員最初の日でした。

家畜保健衛生所の業務に慣れる間もなく、移出牛検査、ダニ駆除指導やヘリコプターによるダニ駆除剤の空中散布にかり出され、玉城敬氏には牛の保定法から牛体ダニ検査をして移出牛検査のための血液塗抹検査まで仕込んでもらいました。一年が経過し一人立ちできるようになった頃から、血液塗抹検査に怒りにも似た疑問を持つようになりました。所長や那根氏に何度もその無意味さを訴えて嘯みついたものです。「子牛時代に感染したバベシア原虫は牛の成長とともに末梢血液中から消失するから、血液塗抹検査成績はバベシア原虫陰性の証明にならないことはわかっているはずなのに、なぜそんな無意味な検査をさせるのか」と、挙げ句の果てには当時の畜産課長補佐であった宮城良有氏にも嘯みつぎ、絶対に移出牛検査はしないと抗議したこともありました。もちろん、若気のいたりで大先輩に対し、直線的な正義感ではでやりました。最後は「ものの言い方に気をつけないか」との感情論に発展したところで仲裁がはいりました。後日、会議の場で宮城課長補佐が自ら「悪かった」と謝ったことには、逆にこちらの胸がキンキン痛む思いがしました。敬意を表すべき先輩方の中でも特に心に残る思い出深い先輩の一人でした。そのばかばかしくもあった血液塗抹

検査は、ダニが蔓延している八重山の畜産農家を救済するための行政的な苦肉の策であったことは、学問的知識しか身につけていなかった当時の私には知るよしもありませんでした。この件に関しては、諸先輩方からきついお叱りを受けたことから、無言の抵抗として、血液塗抹検査をせずに証明書をバンバン発行して胸のつかえを降ろしたものです。このことが後年、畜産課長の伊波寛侑氏に知れることとなり、学問的には非はなかったことから、処分覚悟でそのような行為に至った経緯を素直にさらけ出しました。その件は課長あずかりになったのでしょうか、おとがめが気になりながらも現在になってしまいました。あの事情聴取は、その後どのように処理されたのか、一度聞いてみたい青春時代の思い出でもあります。

連日のように各地区のダニ駆除指導を行っているにもかかわらず、予定していたダニ駆除頭数が集まらないばかりか、作業服には幼ダニが群がってくる状況に、やりばのない敗北感を感じたものです。「いつまで、こんなことを続けるんだ」という思いがつのる八重山勤務の最後の年でした。

ダニはもうコリゴリと思っていた矢先に、家畜衛生試験場への転勤を命じられ、さらに故大仲良治氏の後を受けてダニの研究をせざるを得なくなったのには大いに戸惑ったものです。個性の強い先輩方が多く窮屈な思いもしたが、薄っぺらな知識が通用しない雰囲気があった当時の家畜衛生試験場であったことから、じっくりと研究に打ち込める環境を与えてもらいました。ダニに関する研究を行って5年が経過した頃から、単純な発育環を持つオウシマダニは理論的には意外にも短期間で清浄化される可能性が判明してきました。そのような折の昭和58年9月27日、当時家畜衛生試験場の場長であった宮里松善氏から「多良間島で牛の奇病が発生しているようだから、原因究明のため調査してくるように」との出張を命じられました。